

# ウルトラ音楽術

冬木 透

Fuyuki Tohru

青山 通

Aoyama Toru

まえがき　　～本書について　　冬木透

一 昨年（令和二（二〇二〇）年、著述家の青山通さんから、私の音楽と仕事を通した生涯について記した書籍を出版したいとお話をいただきました。いくつかご相談のうえ承諾させていただいてからおおよそ二年が経過、このたびようやくこのようななかたちで刊行の運びとなりました。この間、私は自分が歩んできた道のりについて、初めて丹念に振り返ることとなりました。

私の代表作を問われたときには、やはりその一つとして『ウルトラセブン』を挙げることになると思います。『ウルトラセブン』は、円谷プロダクションの「空想特撮シリーズ」第三弾として企画され、昭和四二（一九六七）年一〇月から昭和四三（一九六八）年九月まで全四九話が放送されました。すでに最終回から五四年が経っていますが、今でも、リア

ルタイムや再放送で観ていたファンの方たちに愛され、その方たちがお子さんと一緒に観て想いを共にし、さらには孫の世代も見始めていると聞いています。ウルトラシリーズや特撮番組にとどまらず、テレビ番組としても金字塔のような作品として評価され続けていきますし、関連する出版物、CD・DVDなどの音源・映像、宇宙人・怪獣の玩具など各種商品、イベント、演奏会、SNS、出演者や制作関係者のファンミーティングなど、今もまったく途切れることなく続いています。私があるような偉大な作品の重要な要素である「音楽」にかかわれたことは、人生における「宝物」のようなものです。

本書でも、第三章はまるごと『ウルトラセブン』の章としました。「作曲」「録音」「選曲」と分けて制作過程をお話したことにより、『ウルトラセブン』の音楽がどのように作品のなかに位置付いていたのが、少しわかりやすくなったと思います。また各監督との思い出や、各楽曲についても語っていますので、お楽しみいただければ幸いです。才気あふれるプロフェッショナルたちに囲まれて取り組んだ当時の私の仕事は、時代が変わっても、おそらく皆さんの何かしら参考になるものがあると思います。

また、第一章では私と私の音楽の根源となっている満州・上海での幼少時代の原体験、

音楽にのめり込んだ広島での高校・大学時代についてまとめました。この章にある程度のページを割いたのには理由があります。それは、私の作る音楽には、この時代に見たもの聴いたものすべての出来事が反映していることは間違いないからです。戦中戦後の時代における、今では思いもよらないような私の体験を共にしていただくことで、私の音楽をより楽しんでいただけるかもしれません。

第二章では、大学を卒業してラジオ東京（現・TBSホールディングス）で社会人生活をスタートした頃のことを書きました。第四章では、TBSを退職して以降、桐朋学園の教員として務めながらフリーランスの作曲家として活動を続けた時代から現在に至るまでのことを話しています。第五章は、好きな作曲家、指揮者、印象深い演奏会、作曲などクラシック音楽について考えてみました。また巻末では、俳優の道に進んだ私の長女岡本舞が、幼少期の彼女の目に映った冬木家と『ウルトラセブン』について語っています。

これまで私は、テレビ、新聞、雑誌、ラジオ、ネットなどさまざまなメディアの方から取材を受けてきました。しかし本書のようなボリュームで自分自身についてお話ししたのは、初めてのことです。そのなかには、今まであまり語ってこなかったようなこともいく

つかあります。本書は『ウルトラセブン』をはじめウルトラシリーズや特撮番組のファン、私の音楽のファンの方はもちろん、昭和のあの時代のテレビ番組制作がどのようなものだったのか、音楽や作曲を職業にするとはどういうことなのか、ということに関心をお持ちの方にも、興味深くお読みいただけるのではないかと思います。

本書を皆さんが楽しんでくださり、皆さんの人生や仕事にせめて反面教師としてお役に立つことが一つでもあれば、これ以上の喜びはありません。

## 目次

まえがき 〱本書について 冬木透

## 第一章 私の音楽の源泉 〱満州・上海と広島時代

私の原風景／病院の屋上で聴いたレコードコンサート

隣の部屋から聞こえてきたワグナー／小学校入学〱音楽の教科書がない！

大好きだった真方先生／初めて歌った讚美歌／ラジオでなじんだクラシック音楽

錦州駅で終戦を迎える／王兄弟の想い出／引き揚げ船に乗らず錦州に留まる

素晴らしかった上海の音楽環境／日本・広島へ

高校の先輩と連弾したシュトラウス／初めて聴いた生のオーケストラ

転校して合唱部に入部／音楽の道に進むことを決意／作曲家の道を選択

エリザベト音楽短期大学でグレゴリオ聖歌を学ぶ

優れた米兵のオルガニストとの出会い

エリザベトの創立、ゴージェンス初代学長とプリエート神父の想い出

ケンプとの出会い

## 第二章

### 東京へ　　ラジオ東京勤務

ラジオ東京音響課入社／擬音の制作、実音の収集／作曲の仕事始める

さまざまな「○○の冬木」／ハードと表現の進化

国立音大編入、仕事と学業の両立／退学の危機を乗り切る

アルバイトでオルガンを弾く／国立音大卒業／TBS退社、独立

## 第三章

### ウルトラセブン

あまりに偉大な『ウルトラセブン』／子ども向けという意識は持っていなかった

子どもの音感も良くしようと考えた／すべてのセクションが未知へ挑戦

車の中で打診された『ウルトラセブン』の仕事

テレビで宇宙の拡がりを表現できるのは音楽だけ／作曲、選曲、効果の役割分担

作曲・少しでも材料を集めて活かす／作曲の工程／第二回、第三回録音に向けての作曲

作曲のルーツはクラシック音楽／第一回録音の編成と演奏者集め／録音、指揮、予算

選曲の苦労、そして「ゼロ号試写」／各監督とのエピソード／おもしろな楽曲

三ヶ所で使用したクラシック音楽／最終回はとてつもない仕事になるとわかる

なぜシューマンのピアノ協奏曲を使用したのか

なぜカラヤン&リパッティ盤を選んだのか

## 第四章 TBS退社から現在まで

TBS退社の背景／作曲家と桐朋学園教員との二足の草鞋生活／高校ではクラス担任も

『帰ってきたウルトラマン』／「怪獣使いと少年」

『帰ってきたウルトラマン』の印象深い楽曲／以後のウルトラシリーズ

以後のウルトラシリーズの印象深い楽曲／「交響詩ウルトラセブン」の作曲、録音

「冬木透 CONDUCTS ウルトラセブン」での「交響詩ウルトラセブン」の生演奏

冬木透と蒔田尚昊／蒔田尚昊名義の印象深い楽曲／桐朋学園を退職してから  
老後を迎える世代の方へ

## 第五章

### クラシック音楽と私

好きな作曲家／好きな指揮者／好きな楽器／思い出に残る演奏会

仕事で聴く音楽・楽しみで聴く音楽

私にとっての作曲、作曲の仕方、楽器の選び方

『ウルトラセブンの歌』はなぜ変ホ長調なのか

## 特別談話

### 「冬木家で育った私の幼少時代」

岡本舞（俳優／冬木透・長女）

冬木家の音楽環境

桐朋学園の「子供のための音楽教室」、ピアノのレッスン、独学のギター

好きだったカザルスとクライスラー／なぜ音楽ではなく演劇の道を選んだのか

姿勢を正して観た『ウルトラセブン』／最も印象的な作品は「悪魔の住む花」  
『ウルトラセブン』の密度の濃い展開／『ウルトラセブン』のテーマは普遍的

あとがき 冬木透

あとがき 青山通

主要参考文献

第一章 私の音楽の源泉

↳ 満州・上海と広島時代

「『ウルトラセブン』のテーマソングは、どのように作曲したのですか？」とよく聞かれます。「天から何か啓示のようなものが降りてきたのですか？」と尋ねる人もいます。しかし私が作曲するときは、ある日突然何か降りてきて一気に曲ができてしまう、という感じではありません。もちろん、インスピレーションで作る要素もありますが、どちらかというと「ロジカルに音を積み上げていく」というほうが近く、『ウルトラセブン』のテーマソングのときも、同様だったと思います。

とはいえ、作曲をするときにそのような技法によるのは、部分的なことです。「では、そのほかの部分はどうにしているのですか？」と聞かれるのですが、私はそれを明確に語ることはできません。そこについて追及されると困ってしまいます。作曲というものは作曲家によって千差万別だと思えますが、少なくとも私にとって作曲というものは、基本的にそういうものなのです。

それをふまえて、このあとの第一章をお読みいただけますと幸いです。第一章では、私が生まれてから中学生の年齢までを過ごした満州・上海時代のことと、高校・大学生活を送った広島時代のことをお話しします。そこには、私がどのようにして音楽を生み出して

いるのか、ということのヒントのようなものが含まれているかもしれません。

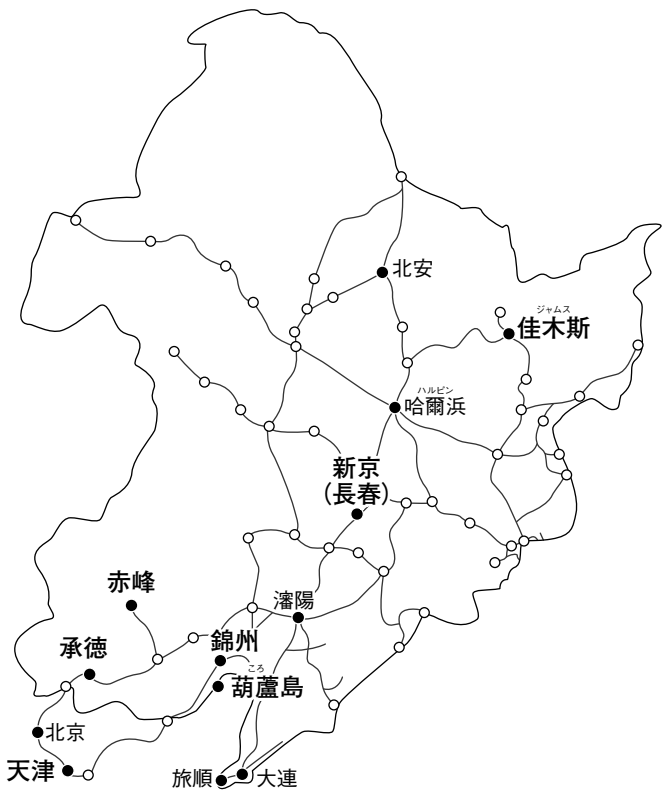
## 私の原風景

自分の作る音楽がどこからくるのか、ということを考えています。私は昭和一〇（一九三五）年三月二三日、旧満州国の首都新京特別市（現在の中国、長春市）常盤町で生まれ、上海を経て昭和二四年に日本に帰国するまで、いわゆる「大陸」で過ごしました。広大な原野のなかで見た落日は、緑がかった真つ赤な太陽が、巨大な線香花火の火の玉のように熟しながら縦に二つ重なってホリゾントの向こうに落ちてゆくようで、地平線の壮大さとともに私の原風景としてよく覚えていきます。しかし原風景とは、その頃私が見たものだけでなく、聴いたもの、私のなかに入ってきたすべてのものなのかもしれません。それは計画的、意図的なものではなく、すべてが偶然の出会いなのです。それらすべてが、その後の私が作るもの、書くものに反映され、充実させる糧になったのだと考えて間違いないでしょう。

## 病院の屋上で聴いたレコードコンサート

小学校に入る前の昭和一六（一九四二）年頃、私は佳木斯ジャムスという南満州鉄道（満鉄）の北端の町に住んでいました。真冬は、零下三〇度、四〇度にもなるようなところでした。父は医者で、私が生まれる前から「大陸」で暮らしていました。勤務する国立康生院は、辺鄙へんびな地域に三ヶ所ほどあり、阿片中毒治療を行っていたとのことです。病院では、中毒患者を捕まえてトラックに乗せては無理やり入院させていました。父はそのやり方に反対して、独自の開放的な治療法に転換し、成功していたようです。やがて父は、転任した先の病院も自身の方針に転換、そこに家族も一緒に引っ越しました。その後も父の仕事の都合で、いくつかの満鉄の主要な駅周辺に住むこととなりました。また、当時満州国の重要な国策の一つとして阿片を取り締まるための「禁煙総局」という組織そくがありましたが、どうやら父はこの一員でもあったようです。

この佳木斯に住んでいた頃、母が入院したのですが、その病院では土曜日に屋上でレコードコンサートをやっていました。私はそこで流れていた曲がとても気に入り、看護婦さんにねだってねだってとうとうそのレコードを買ってもらいました。それは「おもちゃの

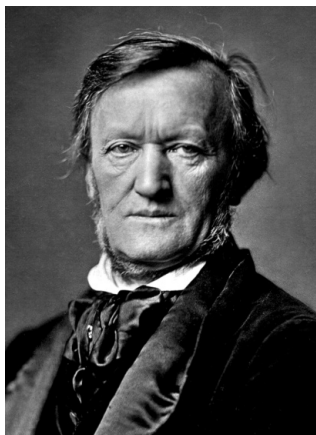


太字は第1章に登場する満州の地域(○—○は南満州鉄道路線)

交響曲」「カッコー・ワルツ」「森の水車」「口笛吹きと犬」といった曲でした。そのレコードは、私の自由になる最初のコレクションとなりました。

### 隣の部屋から聞こえてきたワーグナー

当時、時おり父が病院から帰宅するのが深夜になることがありました。とくに疲れたときだと思いますが、年に何回かレコードを聴いていました。父がかけたレコードから流れる音楽を、私は隣の部屋のふとんの中でふすま越しに聴いていたのです。その音楽のなかで私がとくに心を奪われた曲が、ベートーヴェンの交響曲第八番と、ワーグナーの楽劇「ニーベルングの指環」第一日「ワルキューレ」のラストシーン、「魔の炎の音楽」でした。とくに「魔の炎の音楽」は、子ども心に不思議な印象でした。ドラマティックなところにとっても惹かれました。父に「それは何の音楽なの？」と聞くと、曲名を教えてくださいました。「ワルキューレ」のいちばん最後、ヴォータンが放った炎が、ブリュンヒルデの周囲でどんどん燃え上がっていくシーンの音楽です。「『魔の炎の音楽』。なんだろうこの音楽は？ なんだかすごい曲だなあ」と思って、子ども心に想像をふくらませながら聴いてい



ドイツの作曲家、リヒャルト・ワーグナー(1813-1883)

ました。それは、私が初めて音楽に深く感動した体験です。曲名のとおり、魔術のような音楽だと感じました。そんなワーグナーの楽劇のような音楽が身近にあったことが、のちの私の作曲家としての仕事に影響を及ぼしているのでしょうか。感動的な音楽が自然に耳から入ってきたことは、今から思えば宝物をいただいたような感じですよ。

この頃はまだ、「作曲家」はもとより「音楽家」というものの具体的なイメージすら持っていないませんでした。しかし、この先もずっと音楽がそばにあったらいいなあ、という想いを抱いていたことは覚えています。

### 小学校入学く音楽の教科書がない！

私はこの佳木斯の地で小学校に入学しました。入学式は風邪をひいて欠席し、その後重い肺炎になって危険な状態に陥ったそうです。入学式に出席した母は、私の教科書を持ち帰ってくれました。と

ころがそのなかには音楽の教科書がなくて、私がそれに気付いて伝えると、父は「何が音楽だ！」と言って怒ったのです。

追ってお話ししますが、父は私がおのち音楽を学んだり、音楽の仕事をしたりすることにならずと反対していました。父と私の対立の萌芽が、このときにすでに垣間見えたことになりました。戦前という時代の環境も文化全般にとつて厳しかったですし、さらに父は医者という堅い職業の気難しい人間でした。だから、男性が音楽に夢中になることや、まして職業にすることなど、父には考えられなかったのでしょうか。

小学校には、大人に後ろから抱きかかえてもらつて馬で通学しました。楽しいとか怖いとかの感覚を抱く前に、とにかく寒かったという印象が強く残っています。

近くには松花江しやうかかうという川が流れていて、夏になると病院の職員さんとそこへ泳ぎに行きました。シャケのような大きな魚が泳いでいて、大人がそれを捕まえていたのを覚えていません。また、畑にコーリヤン（もろこし）を盗みに来る泥棒のことも印象に残っています。泥棒を見つけた大人が自転車で追い掛けていくのですが、畝うねがあるのでスピードが出せずになかなか追いつけない。子ども心に、おもしろい光景だなあと思っていました。

## 大好きだった真方先生

その後家族はふたたび新京市に引っ越し、私は春光小学校（師範学校附属）に通いました。ここで真方先生まがたというユニークな先生に出会うのです。おそらく師範学校を卒業して間もない、二〇代後半の男性の体育の先生で、私のクラスの担任でした。私は先生がとても好きでした。

学校は二階建ての赤煉瓦の校舎で、教室は一階が小学校、二階が師範学校でした。つまり、一階に小学生、二階に大学生がいます。大きな運動場が、整地によって日に日に広くなっていくのを見ながら授業を受けていました。

あるとき、真方先生は授業の改革を行いました。毎日一時間目から五時間目まで、小学校と師範学校の授業を合同で行うことにしたのです。それ以来、いつも先生がクラスに五人いる状態になりました。今考えても、授業はすばらしい方向に変わりました。

また真方先生は、小学校と師範学校の合同で行っていた毎日の朝礼の改革も行いました。校長先生の訓話を中止。その代わりに、全員が広い運動場に整列した後に走り始め、途中に並べられているトランポリンなどをぐるぐる回ります。先頭が真方先生、その後ろが

校長先生、それから一年生から学年順、一番最後は師範学校の生徒という順番でした。

そんなある日、私は真方先生と手をつないで自宅への帰途についていました。いろいろと話し込んで、その流れで真方先生は私の家で夕飯と一緒に食べることになったのです。

そのとき真方先生は母と私に、「ところで、まいた蒔田君（冬木透の本名はまいたしょうたう蒔田尚昊）は何か歌とか楽器を特別にお稽古しているのですか？」と尋ねてきました。真方先生は、私に何かしら音楽の才能があることを感じたのだと思うのですが、私は真方先生の前では特別なことは何もしていませんでしたから、どこでそう思われたのかは残念ながらわかりません。私が当時やっていた楽器はハーモニカぐらいでしたし、それを学校で吹いていた記憶もありません。今となつては確かめようもないのですが、とても不思議です。

真方先生とは映画を観た思い出もあります。学校の前の道には市電が走っていて、二駅先に満州国の国策の映画会社である満州映画協会（満映）がありました。年に何回か学校行事として映画鑑賞があり、先生たちとそこへ映画を観に行くのです。李香蘭の映画を観た記憶があります。当時、才能のある多くの日本の映画人がここで映画を作っていて、彼らは戦後日本に戻って日本の映画界で大活躍することとなりました。

この頃の音楽体験として、とてもよく覚えていることがあります。それは日曜日に母とデパートへ買い物に行ったときのことです。母は紫色の矢絣やがすりの着物を着て、私の手を引いていました。雨の上がった街のアスファルトを歩いていると、モーツアルトの「トルコ行進曲」がどこからともなく聞こえてきました。これが、私の記憶に残る最初のモーツアルトです。私にとってこの曲は、雨上がりの光景と結び付いているものなのです。

### 初めて歌った讚美歌

その後私たちは承徳に引越しました。すでに戦争のまったただなかでしたから、小学校の音楽の授業では軍歌しか歌えません。担任の国語の先生が予科練を志望していたのですが、腕を怪我して敬礼ができなかったために入隊を断念していました。そうしたこともあり、私たち生徒は、その先生に「予科練の歌」(「若鷺の歌」)を歌わされてきました。

昭和一七〜一八(一九四二〜四三)年頃は、年に一、二回、旅人のキリスト教の宣教師がわが家を訪ねてきていました。モンゴル地方などを説教、宣教して歩いている福井先生という日本人のご夫婦(福井二郎・敏子)です。中国語に堪能で、非常にきれいな発音で話さ

れる方で、わが家で二泊程度休んでまた旅に出るまでの間に、近所の人を集めてそこでも説教、宣教をしていました。そのなかで、私たちは何曲かの讃美歌も歌いました。このとき私は初めて「讃美歌を歌う」という体験をして、音楽への何か憧れのようなものを抱かされたことを覚えています。これは、私がキリスト教、キリスト教音楽、讃美歌といったものに初めて触れた重要な経験でした。

またこの当時、家には三味線が一棹ありました。父が仕事に出掛けた後、私と母が家で二人だけになると、三味線に合わせて知っている歌を二人で歌いました。それは、自宅のレコードのなかにあったコロムビアの青レーベルの日本の歌、童謡、福井先生から教わった讃美歌などです。母と一緒に「ドードレ、ミーミア、ソーラソミー、ソーファミレー」(イングランド民謡「ロング・ロング・アゴー」)と歌い、その続きを私が間違えると、母は「そこはファームドシー、じゃなくて、ファームレドロー、だよ」などと、直してくれました。

### ラジオでなじんだクラシック音楽

この頃、私はNHKラジオで放送されていた朝のクラシック音楽の番組を聴いていまし

た。当時満州国は日本の統治下にありましたので、ラジオでは基本的に日本語による日本人向けの番組を放送していました。三、四〇分番組のなかで、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトなどのピアノ曲や室内楽曲がよくかかりました。その番組は、おそらく小学校へ行く前からずっと聴いていたため、かなり影響を受けたと思います。前にお話したワーグナーほどの強烈な体験ではありませんが、エドヴィン・フィッシャーのピアノによるベートーヴェン、シューベルトのソナタや即興曲が印象に残っています。私の音楽体験の原点の一つには、このようにして聴いて自然と惹かれていったドイツ音楽があるのです。後年父は私が音楽の道に進むことには反対していたものの、わが家のなかには何気なく音楽があつて、私は知らない間に音楽を植え付けられていたのでしよう。ドイツ音楽を中心に放送していたのはやはり当時の時世からで、フランス、ロシアの音楽はかかりませんでした。

この頃の音楽体験として、もう一つ重要なことがあります。小学四年生の頃、終戦までの数ヶ月間だけ、石原先生という若い女性の先生に個人でピアノを習い、「バイエル」を教わりました。私が母親に頼んだのだと思います。石原先生は、新しく小学校に赴任して

きて私のクラスの担任となった音楽の先生で、わが家の近くに住んでいました。しかし、そのピアノのレッスンも戦争が終わるとともにそれ切りになってしまいました。

また、視覚的にとくに印象に残っていることがあります。あるとき、戦地の兵隊さんに慰問の手紙を書く授業で、私が一等賞になりました。私は夜の生放送のラジオ番組で朗読するために、石原先生と放送局に行ったのです。放送局に着くと、私たちを迎えたのはキラキラとした青や赤のいっぱい電球の光でした。その光景が夢のようで、私は一瞬、手紙の朗読などどうでもよくなりました。のちに羽田空港の滑走路で、青や赤の電球が光っているのを見たときに、その放送局のことを思い出したことがありました。

### 錦州駅で終戦を迎える

さて本書の冒頭で思い浮かべた私の「原体験」のイメージですが、これからお話しするこの時代には……いっせいに花開く五月の満開のニセアカシアの春、二輪車にはためく旗袍、娘々祭りのりんご園、そのまん中で停まる特急列車、魔の炎、ロシア人と腕時計、ラマ教の着ぐるみ、なまはげ仮面、鍋炭を顔にぬる女性の災難、伝染病と友だちの死、関

東軍の敗北・運動場の兵器の山・戦闘機の宙返り……そんな情景が強烈に印象に残っています。

昭和二〇（一九四五）年八月二三日、つまり終戦の二日前、父は承徳の病院に入院している日本人患者の国外への退避を任されることになりました。汽車で朝鮮半島へ抜け、そこから日本へ渡る計画です。急遽準備をし、一四日中には患者と私たち家族ら日本人を乗せた汽車は承徳駅を発ちました。しかし翌一五日の午前中、汽車は承徳駅から三つ目の錦州駅で関東軍によって停められてしまったのです。大人たちが駅長室に集められました。「玉音放送」です。戻ってきた母の泣きはらした顔を見て、子ども心にも日本は戦争に負けたということがわかりました。

終戦を知ったとたんに関東軍は無秩序になりました。私たちが乗って来た列車から乗客たちを暴力的に引きずりおろし、その列車を奪って逃げていったのです。駅長は新たに車輛を仕立てましたが、それも軍に奪われる。またひと車輛仕立てると軍に奪われる。そんなことを繰り返し、最後にはどうにか仕立てた無蓋車輛までも関東軍に乗っ取られるに至

って、とうとう駅長は列車の運行再開を断念しました。

辺りは病人やけが人であふれています。せめて病人の居場所だけでも……と、錦州市街で見つけたのが、情勢悪化にもない生徒全員を帰国させたために空いていた女学校の寄宿舎だったのです。そこへ患者たちを移し、診察室を作り、私たち蒔田家も住みました。診察室の父の机の上に置かれた葉巻の箱には、拳銃が一つしまっておりました。

終戦の日から、満州には人を守るべき政府も軍も存在しなくなりました。私たち家族も夜襲を逃れるため居を移すこともありました。戦時中に虐げられた人々による襲撃、ソ連軍の侵攻、略奪。また時を経て、日本人技術者に対する拉致や拷問……それは厳しい時代でした。いっぽうで、そんななかにあっても、嬉しいことやのどかな時間もあったのです。

## 王兄弟の想い出

私が生まれる前からの父の友人に、満州人の王さんという兄弟がいました。兄の「王安得」さんの「安得」とは、キリストの十二使徒の「アンデレ」から名付けられたと聞いて

います。父は、自分が院長をしていた承德の国立康生院の事務長を王安得さんに任せて、長年深く信頼を寄せていました。その王さんが、錦州に留まっていた私たち家族の居所をどうにか探し当て、承德からのおよそ三五〇キロ近い道程を背中に五、六〇キロあるうかという荷物を担ぎ、徒歩で訪ねてきてくれたのです。そのときの私たち家族の喜びようといったらありませんでした。王さんが「先生、これがなかったら仕事ができないだろう！」と言って取り出したのは、父が承德の病院で使っていたカールツァイスの顕微鏡とライカのカメラだったのです。

王さんには弟がいました。弟は元は馬賊の頭領でしたが、兄に諭され手下たち共々キリスト教徒に改心すると、錦州の郊外に立派な石の鐘楼のあるキリスト教の教会を建てて牧師として布教に努めていたのです。弟は、さらに満州人の子どものための学校を作り、ここでは師範学校を出た先生方による授業を行いました。日本人の生徒は私ともう一人の少年の二人だけで、そこへはおよそ三ヶ月通いました。その学校には、日本語での代数の授業や、中国の古典の授業もありました。「李白」の詩で中国古語による「韻」の美しさを知ったのもそのときです。

ウルトラ音楽術  
冬木透／青山通・著

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：924円（10%税込）

発売日：2022年4月7日

ISBN：978-4-7976-8098-0

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)